岐阜農林事務所の普及活動状況　令和４年 12 月 26 日現在

今月の重点活動

■いちご　グリーンな栽培体系への転換サポートの現地実証

【調査の様子】

管内のいちご生産部会と農林事務所で組織する「グリーンないちご栽培研究協議会」が、微小害虫（アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類）の生物的防除、物理的防除の現地実証試験に取り組んでいる。現行の防除体系より殺虫剤の使用を削減することで、労力削減や環境負荷軽減の効果を期待している。

11 名の生産者が試験を行い、農林事務所では、県農業経営課、農業技術センターと連携して３ほ場で重点的な調査を実施している。生産者が、天敵による害虫防除で要となる発生予察の手法を身に付けてることも実証目的の１つとなっており、各生産者も２週間毎に害虫の発生状況を調査をしている。

10 月から天敵を導入し、12 月現在害虫の発生が抑えられており、十分な効果が得られている。

今後も、実証農家への技術的な支援や調査を継続し、グリーンな栽培体系への転換をサポートしていく。　（園芸産地支援第二係・菊井　裕人、若原　浩司）

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■農福連携　特別支援学校と農業者との交流

【作業風景】

12 月１日、瑞穂市の柿ほ場において、岐阜本巣特別支援学校高等部農業園芸班１年の生徒４名が農作業実習を行った。県が推進する農福連携の一環で、特別支援学校に農業の現場を知ってもらおうとアグリチャレンジ支援センターが主催し、農林事務所が協力して開催した。

当日は、瑞穂市の柿農家が講師となり、柿の収穫方法について説明し、その後、収穫作業を行った。

生徒は講師から聞いたとおり、丁寧に収穫作業を行い、大きな柿が収穫できると大変喜んでいた。作業後には、お土産に自分で収穫した柿を持参して帰った。

今後の活動として、農業者が特別支援学校を訪問する計画である。

（地域支援第一係・山田　和彦）

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稲　ＪＡぎふ特別栽培米生産推進協議会が開催される

【会議風景】

12 月 21 日、ＪＡぎふアグリパークにおいて、ＪＡぎふ特別栽培米生産推進協議会が開催された。当協議会は、減農薬・減化学肥料栽培による安全で安心できる地元産米をＪＡ直売所向けを主体に直接消費者に届けることを目的に、平成 10 年に「ぎふ特別栽培米取扱要領」に基づき設立された生産者組織である。

この日は、Ｒ４年産特別栽培米の生産出荷実績並びＲ５年産の生産出荷計画等について協議が行われ、農林事務所からは、Ｒ４年産の結果に基づきコシヒカリに近年顕著となっている高温障害やイネカメムシの発生対策の他、有機質肥料の実証結果やマイクロプラスチック肥料の代替肥料等について情報提供した。

（地域支援第一係・高橋　宏基）

■水田農業　ＪＡぎふ水田農業担い手連絡協議会研究交流会が開催される

12 月７日、長良川国際会議場においてＪＡぎふ水田農業担い手連絡協議会研究交流会が開催され、土地利用型の組織や担い手、農林事務所、全農岐阜、ＪＡぎふなど約 250 名が参加した。

当日は農林事務所から令和４年産米の作柄について説明し、ＪＡぎふ本店各課から子実とうもろこしの取組経過やマイクロプラスチック代替肥料の現地試験結果について情報提供が行われた。

水田農業の担い手は、肥料や燃料が高騰する中、次年度の作付計画を考える時期となっており、今回の研究交流会は非常に意義深いものとなった。農林事務所では次年度の営農計画策定に向けて、各種情報提供やアドバイスを行っていく。

（地域支援第三係・松本　政行）

■ホウレンソウ　品種試験の収量調査

岐阜市ではエダマメの複合経営品目としてホウレンソウ栽培も盛んである。都市近郊の冬季温暖な微気象を活かし安定的に生産されているが、降雨降雪が多い年はべと病が発生することが産地の課題となっている。そのため、農林事務所では常にべと病のレースに対し最新の抵抗性を持つ品種を導入する支援を継続している。

【試験圃場】

本年は、10月中旬から11月上旬播種で４品種を試験しており、12月１日から収穫調査を行った結果、導入可能な品種があることや播種適期の拡大が見込めることなどが明らかとなった。

べと病抵抗性品種の利用は化学合成農薬を低減できる重要な技術であり、農業者の期待も大きいため、継続して支援していく。

（園芸産地支援第一係・小森　志保）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■ブロッコリー　秋冬ブロッコリー本格出荷

管内の生産者 72 人が 10ha で秋冬ブロッコリーを栽培している。

【試験圃場】

12 月 14 日から、管内で秋冬ブロッコリーの出荷が本格化している。出荷量の９割以上が、県内スーパーへ出荷され、来年３月末まで続く。集荷場所であるＪＡぎふ曽我屋集荷場と各務原予冷庫には、合わせて日量 200 ケース程の出荷があり、出荷規格の確認など意識統一を図った。

本年は天候も安定し、順調に出荷が進み、出荷ピーク時期を迎える見込みである。

農林事務所では、生産者に適期収穫と病害虫防除など指導しており、出荷は順調で、ブロッコリーの生育は平年並みとなっている。

また、Ａ品の基準となる玉締まりの良いものを出荷するために、収穫の朝取り、夕方取りの場合は保冷庫へ入れ鮮度を重視することや単価の良いＬ規格サイズで収穫することなど、ほ場をよく観察して、適期の収穫と管理の徹底を呼びかけた。

（地域支援第一係・藤田　文彦）

■水稲　県オリジナル品種「清流のめぐみ」検討会に参加

12 月６日、ＪＡぎふアグリパーク鈴ヶ坂において令和５年産「清流のめぐみ」に関する検討会が開催され、「清流のめぐみ」作付者のほか米卸業者、農林事務所、農産園芸課、農業技術センター、関連ＪＡなど約 40 名が出席した。農林事務所では、本品種の栽培管理指導や生育調査・坪刈調査を実施しており、当日は現地調査に関する資料提供と概要説明を行った。また、会議では出席者から「清流のめぐみ」の販売動向について質問があり、米卸業者からは「米袋がかわいいこともあり、デビュー直後で知名度が低い割に売れゆきは良い」との回答があった。県では、さらなる作付拡大を目指しており、農林事務所も農家に対して栽培指導や情報提供を行う。

（地域支援第三係・松本　政行）

【清流のめぐみ
パッケージ】

■祝大根　今年も出荷が始まる

関西地方の正月の縁起ものである祝大根の出荷が 12 月 17 日から始まることを受け、12 月 13 日に出荷目揃会がＪＡぎふ則武支店で開催された。

岐阜市のだいこん生産者を中心に、羽島地区も含め、全量が大阪に出荷され、本年は 18,000 ケースの出荷を見込んでいる。農林事務所は、これまでＪＡぎふと連携し、作付け全ほ場の生育調査や栽培指導を行ってきた。本年は、降雨の影響で例年に比べやや小ぶりとなっているが、まずまずの出来具合となっている。

【収穫を迎える祝だいこん】

目揃え会では、「秀品のみ」「Ｍ～２Ｌのみ」の厳しい規格となっていることから、部会役員から、規格について詳しく説明され、いい加減な選別にならないよう指導があった。農林事務所からも、荷姿すべてが商品であるので、選別を正しく行うことを呼びかけた。祝大根の出荷は 12 月 27 日まで予定されている。

（園芸産地支援第一係・砂川　匡）

■カキ、ブドウ、クリ　各産地で間伐・整枝剪定講習会

各品目の出荷終了に伴い、12 月２日に開催された岐阜市の長良果樹振興会ぶどう部会の講習会を皮切りに、山県市の栗生産組合２組織、管内の柿生産組合６組織で、剪定等の講習会が行われ、農林事務所が講師等を対応した。

講習会では、次年度に向けての反省や、間伐・整枝剪定について講習を行った。

農林事務所からは、現地実習や次年度の栽培管理・病害虫対策などを中心に技術支援を行った。特に間伐・整枝剪定は高品質な果実生産の基本であるため、日当たり良く風通しの良い園地づくりを呼びかけた。

【剪定講習会の様子】

（園芸産地支援第二係・杉浦　真由、瀧　孝文）